



たてやま

おのがんまつり

2014.2 No.17

南総祭礼研究会



館山市館山地区 沼区天満神社

天満神社から見た沼地区の風景
真正面に城山が見える



- 地区名 沼区
- 神社名 天満神社
- 屋根 述屋根一直線型
- 屋根葺 黒漆
- 葺手 普及型
- 露盤 樹型
- 極 極
- 造り 塗神輿
- 胴の造り 前後階段二重勾欄
- 枘組 五行二手
- 扉 前後扉
- 鳥居 明神鳥居
- 台輪 普及型
- 台輪寸法 四尺
- 彫刻師 三代後藤義光
- 制作年代 大正八年



地域の紹介

沼地区は館山地区の海沿いに位置する海と共に歩んだ深い歴史を秘めた岡沼、西の浜、西原の三地区からなる、七二〇世帯程の地域です。

「沼」の地名は、沼沢地が広がっていたことに由来すると言われ、明治時代には、沼地区周辺が豊津村と名付けられ、豊かな港になろうと言った意味合いがあったとされています。近隣には海上自衛隊第二十一航空群館山航空基地があります。丘陵部には遺跡が数多く、六世紀代の土製模造品に象徴される「沼つとる」祭礼遺跡、「沼の大寺」の名で親しまれる総持院裏山の「大寺山岩窟墓及び出土品」等が有名です。また、江戸時代後期に活躍した地元沼の絵師・勝山調が描いた「スサノオの凶」がある薬師堂や、石塚のヤグラ等があります。

その他にも名所として、県指定天然記念物の「沼サンゴ層」や、県内最大と言われる「沼のびやくしん」、洞穴に生息し黄金色に輝く「ヒカリモ」等があります。また、「十二天様」と崇拝されている十二天神社周辺の景観や風情は、未来へ遺したい「心の風景遺産」にしたくようなエリアです。

自慢の神輿



三代後藤義光による踊るような龍の彫刻

沼地区天満神社の「大神輿(おおでん)」は大正八年に製作され、館山地区では一番大きく重いとされています。背の高い者が前に、低い者が後ろに入り、太い四本棒を白丁と浅葱色の鉢巻をした三〇人からの担ぎ手が埋めます。

彫刻は房州後藤流三代目後藤義光の手によるもので、一木彫りの「鳥居に絡みつく龍」をはじめ様々な彫刻が施されています。また、前後四枚の扉にちりばめられた美しい螺鈿細工の「梅鉢」も自慢の一つで、この地域の歴史と伝統を後世に伝えるシンボリックな存在となっています。

近年では平成二十三年に、準備期間を含め五か年の歳月を費やし、二十二年振りとなる大修繕を行い、さらに絢爛豪華な神輿の姿に蘇りました。その年の五月二十九日には「神輿修復記念祭」で地区内を渡御し地域の方々にお披露目をしていきます。

「岡沼、西の浜、西原」の三地区により維持・継承された、沼地区自慢の神輿です。



鳥居に絡みつく三頭の龍の彫刻は一木彫りでの秀作



台座にはめ込まれた獅子と牡丹



螺鈿細工が施された扉